

近代文学作品論叢書

不朽の名作は論じつくされることがない！

すでにある論点の再確認から
新たな視点・発想へ

死者の書	14	村の家	12	雪国	11	Ambarvalia	10	夜明け前	9	和解	8	渋江抽斎	7	土	6	夢十夜	5	蒲団	4
永井荷風	13	中野重治	12	川端康成	11	西脇順三郎	10	島崎藤村	9	志賀直哉	8	森鷗外	7	長塚節	6	夏目漱石	5	田山花袋	4
釈迢空	14																		

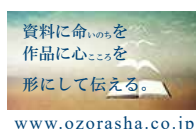
大空社 1995-1998 刊行

残部
僅少

(2023.10)

信頼おける編者が作品論を厳選
影印で複製する引用に便利な資料
解説・文献目録付き

* 日本近代文学研究関係書15



学術資料出版
大空社出版

近代文学作品論叢書

残部
僅少

大空社 1995-1998 刊行

- この案内（目次抄）は
現在（2023.5）「在庫がある」もの
のみを紹介しています。
⇒一覧最終ページ

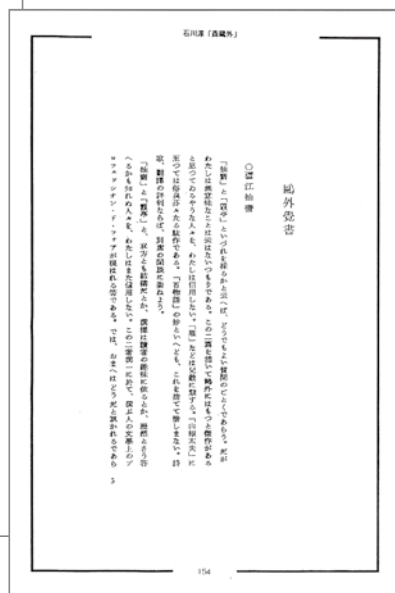
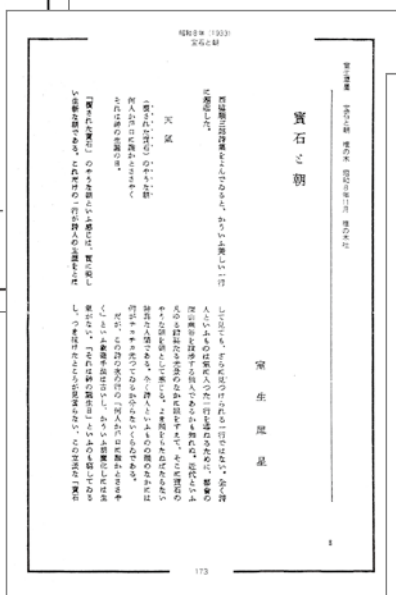
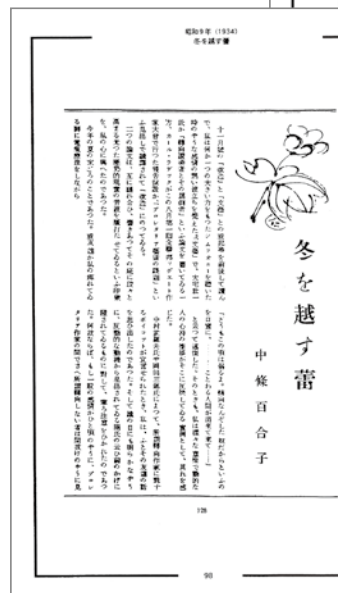
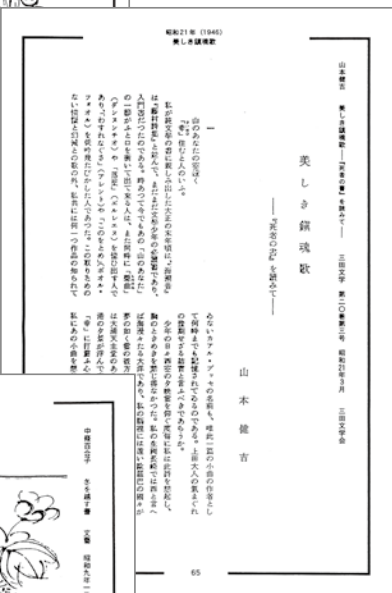
研究業績を俯瞰

さらなる探究のステージへ！

* 近代日本文学の名作（小説、詩、歌、評論）について
の「作品論」を集成。

* 信頼おける編者による確かな目で厳選した「作品論」
に加え解説・研究文献目録を収録。

* 作品論は論稿、評論から作品発表当時の書評・座談
会録を年代順に収録。

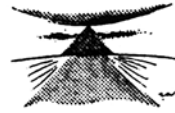


《商品の状態について》

刊行年が古いので、読書に
支障はないものの、経年による劣化（小口のしみ、表紙クロスの焼け等）が見られます。ご注文の際にはご承知おきのほどお願いいたします。（大空社出版）

昭和59年(1984)
「夢十夜」の作品世界 女性による研究誌

大岡昇平 幻想の生れる場所—『夢十夜』をめぐる— 群像 第四〇巻第一号 昭和60年1月1日 講談社



幻想の生れる場所

—『夢十夜』をめぐる—

大岡昇平

漱石の作品は概して姦通もしくは、いわゆる三角関係を扱っています。偏執といってもいいほど同じ主題を追求しています。人物の行動と心理をリアリスチックに物語に仕立てたもので、登場人物は穏健な中流の知識階級です。市民文学といわれ、彼が国民的規模で今日まで人気のある理由ですが、私たちの世代、という昭和二年で十八歳、彼の第一期全集第二回配本(大正十年頃)を中学生として読んだ世代には、生ぬるく見えました。フランスのボードレー、ランボーに比べると「自我の燃焼が足りない」なんて、中原中也が昭和二年の日記に書いています。小林秀雄、河上徹太郎にも漱石論はありません。ただ漱石は内に狂気を秘めていて、家庭では激しい面を見せていたのが、鏡子夫人の『漱石の思ひ出』(昭和三年)からわかって来て、その内部にかくされていたものが、注目される

ようになったのです。

漱石には普通の長篇小説のほかに、初期の「潑虚集」の系統のロマンチックな短篇の流れがあります。朝日新聞にはほぼ年に一篇の割で長篇小説を書く合間に、『夢十夜』(明治四十一年)『永日小品』(四十二年)など、幻想的な短文、随想を書いています。そこに却って彼の心の深層が露呈している、という説がこの頃は有力です。特に『夢十夜』には、こわい話があつて、弟子の内田百閒はこの作風を受け継いで「冥途」という作品集を大正十一年に出しています。百閒は戦後の『百鬼園随筆』『阿房列車』シリーズが有名ですが、私たちは戦前のこの作品を高く評価していました。私は富永太郎の残した本で読みました。「夢十夜」もそうですが、短い散文詩のような作品なので、散文詩人であつた富永にふさわしい蔵書でした。

田山花袋 蒲団

加藤秀爾 編

収録作品論 92 点

全 3 巻 総 1370 頁

第Ⅰ巻 目次

『蒲団』研究小史

加藤秀爾

1

田山花袋『蒲団』作品論研究文献目録

加藤秀爾 編

11

田山花袋『蒲団』作品論 I

明治四〇年（1901）

小栗風葉／正宗白鳥／徳田（近松）秋江／片上天弦／水野葉舟／

松原至文／中村星湖／相馬御風／星月夜（島村抱月）

『蒲団』合評

37

太田正雄（木下李太郎）／平出

4

田山花袋氏の『蒲団』

中山路峰

4

一記者

4

横山よし子

4

第Ⅱ巻 目次

田山花袋『蒲団』作品論 II

大正四年（1915）

永代美知代

5

『蒲団』、『縁』及

5

昭和四年（1925）

無署名

11

無署名

11

無署名

11

花袋と『蒲団』

11

昭和四三年（1968）

大久保典夫

45

文学史的位置づけ

45

田中栄一

57

田山花袋論——『蒲団』を中心として——

57

昭和四五年（1970）

長谷川吉弘

81

『蒲団』について——時男の苦悩を中心に——

81

平野 謙

85

堀井哲夫

96

花袋一人の女と『蒲団』『縁』

96

昭和四七年（1972）

山本昌一

111

●目次より（縮小）

昭和三年（1948）

第Ⅲ巻 目次

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

神崎 清

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

昭和二年（1949）

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

片岡良一

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

昭和五年（1950）

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

中村光夫

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

風俗小説論（上）

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

近代リアリズムの

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

昭和二年（1951）

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

和田謹吾

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

『蒲団』

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

昭和六〇年（1985）

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

土佐 亨

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

高橋敏夫

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

『蒲団』の匂い——比較文学的ノート——

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

『蒲団』——「暴風」に区切られた物語——

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

昭和六一年（1986）

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

大里恭三郎

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

田山花袋『蒲団』論——滑稽家の悲哀——

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

昭和六二年（1987）

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

棚田輝嘉

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

野口武彦

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

昭和五〇年（1975）

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

田所 周

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

見えないもの——『蒲団』試論——

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

昭和五一年（1976）

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

千葉俊二

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

花袋『蒲団』断想

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

『蒲団』管見——その喜劇性に触れて——

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

『蒲団』——「竹中時雄」論——

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

『蒲団』論——花袋の自己探求と自己否定——

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

『少女病』から『蒲団』への飛躍

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

自然主義文学における『蒲団』

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

『蒲団』における田山花袋の思想の断片

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

芳子への「愛情」の姿を分析しながら——

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

『蒲団』の文学的意義とその限界

田山花袋『蒲団』作品論 III

5

夏目漱石 夢十夜

坂本育雄 編

収録作品論 117 点

全 3 巻 総 1580 頁

● 目次より (縮小)

第Ⅰ巻 目次

『夢十夜』作品論集成 解説

坂本育雄

1

夏目漱石『夢十夜』作品論研究文献目録

坂本育雄 編

21

夏目漱石『夢十夜』作品論 I

第Ⅲ巻 目次

夏目漱石『夢十夜』作品論 III

昭和59年(1984)

石原千秋 『夢十夜』における他者と他界

宮井一郎 『夢十夜』

金戸清高 漱石『夢十夜』の世界

高崎みどり 『夢十夜』の作品世界

昭和60年(1985)

大岡昇平 幻想の生れる場所―『夢十夜』をめぐる

笹淵友一 新稿『夢十夜』論―第十夜―

松島芳昭 生不安 漱石『夢十夜』

昭和62年(1987)

越智悦子 『夢十夜』を読む―『第二夜』短刀と侍―

松元季久代 『夢十夜』第一夜―字義的意味の蘇生―

亀井雅司 『夢十夜』の視線

昭和63年(1988)

百川敬仁 夏目漱石―夢十夜 主題化する時間

大竹雅則 『夢十夜』―生のかなしみ―

宮澤健太郎 『夢十夜』の文体論的考察

85

平成元年(1989)

石井和夫 『夢十夜』

尹相仁 『夢十夜』

大坪利彦 『夢十夜』

清水孝純 『夢十夜』

平成2年(1990)

山田晃 父母未

平成3年(1991)

石井和夫 『夢十夜』

山崎甲一 『夢十夜』

中原豊 『夢十夜』

仲秀和 『夢十夜』

平成4年(1992)

山崎甲一 『夢十夜』

平成5年(1993)

古井由吉 凝滞す

第Ⅱ巻 目次

夏目漱石『夢十夜』作品論 II

昭和48年(1973)

山中節子 この現実の壁の向こうに―漱石とギリシャ

荒正人 解説 (『夢十夜』試論 第一部)

内田道雄 漱石の自然―そのまえがきとして

桑原三千枝 漱石の色彩世界―『夢十夜』を中心として

昭和49年(1974)

小坂晋 赤い井守の腹―『夢十夜』の謎―

山本勝正 漱石『夢十夜』の世界―漱石に於ける夢と現実―

桶谷秀昭・柄谷行人 漱石文学の運命―『夢十夜』の第八夜(対談)

昭和50年(1975)

藤田修一 『夢十夜』小論

大岡昇平 漱石とキリスト教

紅野敏郎 『四篇』『夢十夜』の不安と願望

佐藤泰正／越智治雄／平岡敏夫／高本文雄／相原和邦

『夢十夜』をどう読むか(シンポジウム)

156

151

136

131

113

65

野村純一 『夢十夜』と口承文芸(研究ノート)

中村宏子 夏目漱石―『夢十夜』の世界

榎山久雄 不明不暗に生きるもの

関谷由美子 夏目漱石試論 I

笠原伸夫 夢の文学 夢の原層へ―夏目漱石

平井敬員 『夢十夜』論の現在

相原和邦 『夢十夜』の世界

昭和53年(1978)

高橋英夫 漱石における夢―『夢十夜』に触れつつ

下山ちづ子 『夢十夜』の構造

341

347

5

長塚節 土

梶木剛・河合透 編

収録作品論 104 点

全 4 巻 総 2020 頁

●目次より (縮小)

第Ⅰ巻 目次

『土』誌

梶木 剛

1

長塚 節『土』作品論研究文献目録

梶木 剛・河合 透 編

59

長塚 節『土』作品論 I

明治四十五年 (1912)

夏目漱石 「土」に就て (長塚節『土』)

安倍能成 長塚節氏の『土』

133 117

大正四年 (1915)

夏目漱石 釣鐘の好きな人

鈴木三重吉 長塚節氏の追憶

橋詰孝一郎 思ひでのか

142 139

大正六年 (1917)

小島政二郎 日本自然主

大正十一年 (1922)

犬田 卯 長塚節氏を

和田 伝 解説 (長塚節『土』〈新潮文庫
中野重治 解説 (現代日本小説大系)

昭和二十八年 (1953)

唐木 順三 解説 (長塚節『土』〈創元文庫
森下金二郎 長塚節『土』論

昭和二十九年 (1954)

玉井 敬之 『土』について

橋本 佳 『土』のリアリズム

井上 清 長塚節『土』 (岩波講座 文学の創造と鑑賞)

昭和三十年 (1955)

中野 重治 「土」について

白井 吉見 解説

飯野農夫也 (現代日本文学全集6『正岡子規 伊藤左千夫 長塚節集』

鶴田知也 郷土から見た長塚節

杉浦明平 長塚節の描寫法——『土』は讀みづらいか?——

「土」について

128 122 114 111 101 80

第Ⅲ巻 目次

長塚 節『土』作品論 III

昭和四十九年 (1974)

篠田 一士 この珍貴の感覚 (上)——詩から小説へ——

橋本 佳 『土』論その後

篠田 一士 この珍貴の感覚 (下)——詩から小説へ——

中野 孝次 『土』と漱石と白鳥と

53 36 21 5

昭和五十年 (1975)

井上 俊夫 長塚節

若杉 慧 「土」の

昭和五十一年 (1976)

山田清三郎 長塚節

昭和五十二年 (1977)

饗庭孝男 小説の場

若杉 慧 「土」の

昭和五十三年 (1978)

真鍋亜紀子 長塚節論

小田 実 「土」の

昭和五十七年 (1982)

小瀬千恵子 「土」の性格 (『長塚節文学考』

林 正子 「土」論——インセスト問題・反措定への試み——

昭和五十八年 (1983)

広瀬朱実 「土」における写生の方法と長塚節

中村良衛 「長塚節『土』を読む」

昭和六十一年 (1986)

山下惣一 「土」論の試み (『長塚節『土』を読む』

山下惣一 山下惣一さんと土をよむ

岩佐壮四郎 「土」——〈人事〉と〈自然〉の劇——

平岡敏夫 「世紀末の自然主義——明治四十年代文学考——」

昭和六十二年 (1987)

村上林造 「新鋭研究叢書9」

昭和六十二年 (1987)

村上林造 『土』序文と『彼岸過迄』

中尾 務 近代日本精神史の一側面として——

——長塚節『土』小見——

128 122 114 111 101 80

森鷗外 渋江抽斎

残部
1冊

長谷川泉 編

収録作品論 37 点

全 1 巻 総 520 頁

●目次より (縮小)

解説

長谷川 泉

1

森鷗外『渋江抽斎』作品論と解題

第一部

吉田増蔵	森先生に就て……
一戸 努	鷗外作「澁江抽斎」の資料……
森潤三郎	鷗外森林太郎傳……
木下李太郎	藝林間歩……
木下李太郎	鷗外先生の評論と史伝……
宇野浩二	鷗外作品の現実描写……
一戸 努	鷗外先生の蔵書……
林 達夫	鷗外における小説の……
高羽四郎	鷗外の考証家傳……

第二部

森潤三郎	鷗外森林太郎……
森 鷗外	澁江抽斎……
	——齋藤茂吉「解説」、内容目次、……
高橋義孝	歴史小説論……
高羽四郎	森鷗外の史的作品 下……
秋山光夫	あの日この日——鷗外追憶——……
伊藤至郎	鷗外論稿……
石川 淳	森鷗外……
唐木順三	鷗外の精神……
日夏耿之介	鷗外文学……
高橋義孝	森鷗外——文藝学試論——……
伊藤 整	小説の問題……
伊藤佐喜雄	医儒たちへの郷愁……
岩上順一	歴史文学論……
日夏耿之介	鷗外創作力の発展と終局……
唐木順三	森鷗外……
西尾 實	作品研究 鷗外の歴史小説……

307 297 293 272 257 223 211 192 145 130 11

稲垣達郎 森鷗外……

三島由紀夫 文章読本……

長谷川 泉 森鷗外論考……

附 中国語訳

昭和女子大学近代文学研究室 森鷗外……

渋川 驍 澁江抽斎……

長谷川 泉 現代文章の味わい方……

附 中国語訳

石川 淳 森鷗外……

附 竹盛天雄 解説

板垣公一 森鷗外の史伝——『澁江抽斎』論——……

小泉浩一郎 森鷗外論 実証と批評……

松木 明 渋江抽斎人名録……

山崎一類 森鷗外・史伝小説研究……

近代作家用語研究会教育技術研究所編 作家用語索引 森鷗外 第五巻 澁江抽斎……

小泉浩一郎 “Edwin McClellan: Woman in the Crested Kimono”……

稲垣達郎 森鷗外の歴史小説……

アムバルワリア

西脇順三郎

Ambarvalia

澤正宏 編

収録作品論 56 点

全 2 巻 総 760 頁

第Ⅰ巻 目次

『Ambarvalia 〈アムバルワリア〉』研究史の概要

澤 正宏

1

西脇順三郎『Ambarvalia 〈アムバルワリア〉』
作品論研究文献目録

澤 正宏 編

11

西脇順三郎『Ambarvalia 〈アムバルワリア〉』作品論 I

昭和八年（1933）

（不明）西脇順三郎詩集〈広告文〉

31

岩崎良三西脇順三郎氏の詩について

32

百田宗治西脇順三郎詩集〈広告文〉

36

百田宗治西脇順三郎詩集

37

西脇順三郎詩集について

38

百田宗治詩作法

39

百田宗治西脇順三郎詩集〈広告文〉

42

室生犀星宝石と朝

43

岩崎良三／阿部知二他

千九百三

関 良一ギリシヤ的抒情詩

——西脇順三郎『Ambarvalia』（五）——

141

関 良一ギリシヤ的抒情詩

——西脇順三郎『Ambarvalia』（六）——

150

西脇順三郎

近代人の憂鬱

161

木下常太郎解説 Ambarvalia（アムバルワリア）について

171

昭和四二年（1967）

鍵谷幸信西脇順三郎論（16）——Ambarvaliaの成立——

189

安部宙之介西脇順三郎「皿」

192

西脇順三郎他11名西脇セシナー〈第一回〉Ambarvalia

196

西脇順三郎他12名西脇セシナー〈第二回〉Ambarvalia

214

西脇順三郎他12名西脇セシナー〈第三回〉Ambarvalia

238

西脇順三郎他13名西脇セシナー〈第四回〉Ambarvalia

259

西脇順三郎他12名西脇セシナー〈第五回〉Ambarvalia

280

西脇順三郎他12名西脇セシナー〈第六回〉Ambarvalia

301

西脇順三郎他12名西脇セシナー〈第七回〉Ambarvalia

318

西脇順三郎他12名西脇セシナー〈第八回〉Ambarvalia

340

安部宙之介西脇順三郎「ギリシヤ的抒情詩」私解

364

昭和一〇年（1935）

阪本越郎西脇順三郎小論 Ambarvaliaの精神

57

昭和二八年（1953）

村野四郎解説

昭和三〇年（1955）

鶴沢 覚現代詩鑑賞 西脇順

昭和三一年（1956）

西脇順三郎詩二つ 自作の打明

昭和三八年（1963）

近藤 東詩集『Ambarvalia』

昭和四〇年（1965）

北川 透西脇順三郎論ノート

分銅惇作西脇順三郎「ギリシヤ

第Ⅱ巻 目次

西脇順三郎『Ambarvalia 〈アムバルワリア〉』作品論 II

昭和四四年（1969）

小海永二 Ambarvalia

5

昭和四五年（1970）

西脇順三郎他4名 こゝろの衝撃力

29

昭和四六年（1971）

中野嘉一詩集『Ambarvalia』（おむねるわりあ）

115

昭和四七年（1972）

芝山幹郎 Ambarvaliaとて

141

昭和四八年（1973）

澤 正宏『Ambarvalia』論

149

昭和五三年（1978）

越智良二西脇順三郎「ギリシヤ的抒情詩」小考

159

昭和五四年（1979）

飯島耕一テラコタの夢と知れ 1924 - 1933

169

千葉宣一西脇順三郎「眼」

234

平成五年（1993）

工藤美代子寂しい声 西脇順三郎の生涯18

347

平成六年（1994）

千葉宣一西脇順三郎の基礎的研究▼国際的波動と方法的特質

355

あとがき

澤 正宏

373

川端康成 雪国

岩田光子 編

収録作品論 89 点

全 3 巻 総 1310 頁

●目次より（縮小）

第 1 巻 目次

解 説

川端康成『雪国』作品論研究文献目録

岩田光子 編 33

川端康成『雪国』作品論 I

昭和 16 年（1940）
長谷川 泉 「雪国」論―理智の舞踏と抒情の彫像―…………… 121

坂本 浩 美の創造―「雪国」と「天の夕顔」…………… 113

昭和 9 年（1934）

昭和 22 年（1947）

伊藤 整

榊 山 潤 〈新年号の創作時評・5〉巧妙なる手品師…………… 57

昭和 24 年（1949）

中島 健蔵

昭和 11 年（1936）

昭和 27 年（1952）

杉浦 明平

小林 秀雄 〈文芸時評〉作家の虚無感―川端康成の「火の枕」―…………… 61

昭和 28 年（1953）

伊藤 整

古谷 綱武 「徒勞」について…………… 62

昭和 28 年（1953）

伊藤 整

昭和 12 年（1937）

昭和 61 年（1986）

赤塚 正幸

青野 季吉 川端・尾崎の文学…………… 71

昭和 61 年（1986）

赤塚 正幸

上 司 小 剣 最後……………

昭和 62 年（1987）

奥 出 健

小林 秀雄ほか……………

昭和 62 年（1987）

奥 出 健

昭和 32 年（1957）

昭和 62 年（1987）

奥 出 健

昭和 13 年（1938）

昭和 62 年（1987）

奥 出 健

板垣 直子 現代……………

昭和 62 年（1987）

奥 出 健

昭和 14 年（1939）

昭和 62 年（1987）

奥 出 健

昭和 34 年（1959）

昭和 62 年（1987）

奥 出 健

昭和 36 年（1961）

昭和 62 年（1987）

奥 出 健

昭和 40 年（1965）

昭和 62 年（1987）

奥 出 健

昭和 41 年（1966）

昭和 62 年（1987）

奥 出 健

昭和 45 年（1970）

昭和 62 年（1987）

奥 出 健

昭和 49 年（1974）

昭和 62 年（1987）

奥 出 健

昭和 53 年（1978）

昭和 62 年（1987）

奥 出 健

昭和 57 年（1982）

昭和 62 年（1987）

奥 出 健

昭和 61 年（1986）

昭和 62 年（1987）

奥 出 健

昭和 65 年（1990）

昭和 62 年（1987）

奥 出 健

昭和 69 年（1994）

昭和 62 年（1987）

奥 出 健

昭和 73 年（1998）

昭和 62 年（1987）

奥 出 健

昭和 77 年（2002）

昭和 62 年（1987）

奥 出 健

昭和 81 年（2006）

昭和 62 年（1987）

奥 出 健

昭和 85 年（2010）

昭和 62 年（1987）

奥 出 健

昭和 89 年（2014）

昭和 62 年（1987）

奥 出 健

310 303

293

317

307

300

293

282

257

229

218

214

208

165

149

81

76

60

46

38

15

11

永井荷風 澤東綺譚

高橋俊夫 編

収録作品論 106 点

全 4 巻 総 1990 頁

第 1 巻 目 次

解説

高橋俊夫

1

永井荷風『澤東綺譚』作品論研究文献目録

高橋俊夫 編

9

永井荷風『澤東綺譚』作品論 I

昭和12年(1937)

萩原朝太郎 漂泊者の文学―永井荷風氏の澤東綺譚を読む

31

佐藤春夫『澤東綺譚』を読む

36

片岡良一『澤東綺譚』と『雪国』と『冬の宿』

41

平井程一 永井荷風論―読『澤東綺譚』

45

昭和22年(1947)

佐藤春夫 澤東綺譚

吉田精一 澤東綺譚

昭和24年(1949)

高橋義孝『澤東綺譚』

昭和26年(1951)

斎藤茂吉 澤東綺譚

福田恒存 澤東綺譚

第II巻 目 次

永井荷風『澤東綺譚』作品論 II

昭和46年(1971)

小門勝二 澤東綺譚自筆原稿複製にあたって

高橋俊夫『澤東綺譚』と近世文学

高橋俊夫『澤東綺譚』と『荷風日記』(断腸亭日乗)

野口富士男『澤東綺譚』覚え書

野口富士男『覚え書』補遺

昭和47年(1972)

唐木順三 永井荷風―『澤東綺譚』まで―

竹盛天雄 解説

高橋俊夫 荷風の小品「放水路」の推敲過程

―『澤東綺譚』の原型の探索―

種田政明『澤東綺譚』(管見・荷風文学素稿の十五)

昭和48年(1973)

大野秋紅 私家版『澤東綺譚』その俳句と写真

坂上博一『澤東綺譚』論

小門勝二 澤東綺譚の町―テレビ台本―

古屋健三『澤東綺譚』―この事実の夢―

新延修三 永井荷風

昭和28年(1953)

伊庭心猿 墨東古調―統荷風翁の発句―

昭和29年(1954)

平野 謙 永井荷風『澤東綺譚』

昭和30年(1955)

岡野他家夫『澤東綺譚』

吉行淳之介『澤東綺譚』

小山勝治『澤東綺譚』小史

宮城達郎『澤東綺譚』の含む諸問題

昭和31年(1956)

相磯凌霜 餘話

成立と構造

『れた頃』

〔前〕十一巻

笹刈友一 第一章澤東綺

重友 毅 澤東綺譚論攷

高橋俊夫 澤東綺譚私注

三好文明『澤東綺譚』論

高橋俊夫『澤東綺譚』

昭和52年(1977)

後藤 亮『澤東綺譚』

高橋俊夫『梅暦』と荷風小説(その風土の連関)

―「すみだ川」と『澤東綺譚』を中心に―

昭和53年(1978)

高橋俊夫 古川柳と『澤東綺譚』

磯田光一 澤東の秋―永井荷風(九)

三好文明 吉行淳之介ノート―永井荷風との関係―

無 署名 モデルがいた澤東綺譚のお雪さん

昭和54年(1979)

秋庭太郎『澤東綺譚』好評 附お雪モデル考の事

吉行淳之介 解説

前田 豊『澤東綺譚』の周辺

昭和63年(1987)

松田良一『澤東綺譚』論―ラヂオと蚊の音―

江藤 淳 メタ・小説としての『澤東綺譚』

(紅茶のあとさき十三)

平成4年(1992)

新藤兼人・馬場当(対談) 荷風の生と性

―『澤東綺譚』をめぐる―

平成5年(1993)

劉 建輝『澤東綺譚』―その文人世界の構造―

島村 輝『澤東綺譚』の方法

中島国彦『澤東綺譚』における秩序と混沌

金子明雄 一人の「わたし」・複数の「わたし」

―『澤東綺譚』の領域―

桜井 透 永井荷風 東京・玉の井

新藤兼人『澤東綺譚』について

(参考資料)

澤東綺譚関係記事抄 断腸亭日乗

永井荷風『寺じまの記』

木村莊八(澤東綺譚の挿絵を描いた画家)の文章五種

●目次より(縮小)

空 昶 死 者 の 書

石内徹 編

収録作品論 99 点

全 3 巻 総 1180 頁

第 1 巻 目 次

『死者の書』研究小史

石内 徹 1

空 昶『死者の書』作品論研究文献目録

石内 徹編 19

空 昶『死者の書』作品論 I

石内 徹編 19

昭和14年 (1939)

白居雅雄

空 昶の「死者の書」

47

室生犀星

徹する処なし 諸家の諸作品を通して

48

(文芸時評 (5))

48

昭和18年 (1943)

堀 辰雄

大和路信濃路「死者の書」

石内 徹編 19

昭和19年 (1944)

芳賀 壇

空 昶『死者の書』作品論 II

石内 徹編 19

昭和21年 (1946)

山本健吉

昭和49年 (1974)

川村二郎

解説

石内 徹編 19

篠田一士 この珍貴の感覚(下)——詩から小説へ——

5

昭和50年 (1975)

大岡昇平 折口信夫と文学

石内 徹編 19

笠原伸夫 逆光の近代

石内 徹編 19

川村二郎

『死者の書』再説——文学の根への問い

10

昭和51年 (1976)

佐藤えみ子

『死者の書』——試論

石内 徹編 19

森 繁根

折口信夫『死者の書』論——日本文学の本質——

97

昭和52年 (1977)

天沢退三郎

『死者の書』あるいは二つの(作品)

123

井口樹生

『死者の書』論

石内 徹編 19

饗庭孝男

悲劇の精神——折口信夫『死者の書』——

132

昭和23年 (1948)

吉田健一

小説論 平野謙『島崎

空 昶『死者の書』

『死者の書』の視覚的問題について

62

昭和28年 (1953)

神西 清

不思議な永遠の若さ

石内 徹

文芸思潮のドグマ

68

加藤道夫

『死者の書』と共に

石内 徹

『死者の書』

75

昭和29年 (1954)

坂本徳松

『死者の書』の向日性

石内 徹

『死者の書』の重層性——

123

藤井貞文

きさらぎの雪——『死者

石内 徹

『死者の書』の重層性——

123

昭和34年 (1959)

江藤 淳

小説の文体

石内 徹

『死者の書』の重層性——

123

昭和35年 (1960)

大室幹雄

二

石内 徹

『死者の書』の重層性——

123

昭和36年 (1961)

笠原伸夫

結

石内 徹

『死者の書』の重層性——

123

昭和37年 (1962)

笠原伸夫

結

石内 徹

『死者の書』の重層性——

123

昭和38年 (1963)

村松定孝

折

石内 徹

『死者の書』の重層性——

123

昭和39年 (1964)

阿部正路

折

石内 徹

『死者の書』の重層性——

123

昭和40年 (1965)

藤井貞和

二

石内 徹

『死者の書』の重層性——

123

昭和41年 (1966)

東郷克美

二

石内 徹

『死者の書』の重層性——

123

昭和42年 (1967)

吉益 謙

『折口信夫の『死者

石内 徹

『死者の書』の重層性——

123

昭和43年 (1968)

中村 浩

『死者の書』地名考

石内 徹

『死者の書』の重層性——

123

昭和44年 (1969)

梶木 剛

『死者の書』/空 昶

石内 徹

『死者の書』の重層性——

123

昭和45年 (1970)

中村 浩

『死者の書』地名考

石内 徹

『死者の書』の重層性——

123

昭和46年 (1971)

中村 浩

『死者の書』地名考

石内 徹

『死者の書』の重層性——

123

昭和47年 (1972)

中村 浩

『死者の書』地名考

石内 徹

『死者の書』の重層性——

123

昭和48年 (1973)

江藤 淳

女の旅立(女の記号学(3))

石内 徹

『死者の書』の重層性——

123

昭和49年 (1974)

小野左和子

『死者の書』の視覚的問題について

62

昭和50年 (1975)

石内 徹

『死者の書』の視覚的問題について

62

昭和51年 (1976)

川村二郎

『死者の書』の視覚的問題について

62

昭和52年 (1977)

塚本邦雄

『死者の書』の視覚的問題について

62

昭和53年 (1978)

原山喜亥

『死者の書』の視覚的問題について

62

昭和54年 (1979)

岡谷公二

『死者の書』の視覚的問題について

62

昭和55年 (1980)

高橋広満

『死者の書』の視覚的問題について

62

昭和56年 (1981)

夏石番矢

『死者の書』の視覚的問題について

62

昭和57年 (1982)

石内 徹

『死者の書』の視覚的問題について

62

昭和58年 (1983)

吉田達志

『死者の書』の視覚的問題について

62

昭和59年 (1984)

結城 文

『死者の書』の視覚的問題について

62

昭和60年 (1985)

結城 文

『死者の書』の視覚的問題について

62

昭和61年 (1986)

持田叙子

『死者の書』の視覚的問題について

62

昭和62年 (1987)

長谷川政春

『死者の書』の視覚的問題について

62

昭和63年 (1988)

森安理文

『死者の書』の視覚的問題について

62

昭和64年 (1989)

石内 徹

『死者の書』の視覚的問題について

62

昭和65年 (1990)

石内 徹

『死者の書』の視覚的問題について

62

昭和66年 (1991)

松浦寿輝

『死者の書』の視覚的問題について

62

昭和67年 (1992)

中村 浩

『死者の書』の視覚的問題について

62

昭和68年 (1993)

江藤 淳

『死者の書』の視覚的問題について

62

新文学研究

全 22 冊・別冊 1

曾根博義監修 [大空社 1994. 6]
菊 / 四六判 4-87236-912-2
定価 160,194 円 (本体 145,631 円)



■伊藤整編輯、金星堂刊『新文学研究』全 6 輯 (昭和 6. 1 ~ 昭和 7. 5)、『列冊新文学研究』全 16 冊 (昭和 7. 9 ~ 8. 6) の複製 (フランス装)。ジョイス、プルースト、ロレンス、ウルフ、ハックスリー、パウンド…20 世紀文学の最前線を受容 (研究・翻訳・紹介) した昭和モダニズムの華。別冊は解題・総目次・索引。

トルストイ研究

全 29 冊・別冊 1

柳富子解説 [大空社 1985]
菊判 4-87236-013-3
定価 60,500 円 (本体 55,000 円)



■トルストイ会編・新潮社刊、1916・大正 5 年 9 月 ~ 1919・大正 8 年 1 月刊 (総約 2360 頁) の複製 (函入)。内田魯庵、中村白葉、昇曙夢、大泉黒石、八杉貞利、米川正夫、岩野泡鳴、島村抱月、豊島与志雄、本間久雄、広津和郎、小山内薫、片山伸、木村毅、近松秋江、山村暮鳥、室生犀星、阿部次郎、相馬御風、徳富蘇峰、等々、当代の文芸・思想・宗教等の分野の第一線執筆陣による、論文・随想・翻訳を掲載。別冊は解説・全執筆者索引・総目次。

永井荷風「四畳半襖の下張」惣ざらえ

高橋俊夫 編著 [大空社 1997. 9]
A5 判・上製・240 頁 4-7568-0565-5 * 残部数冊
定価 5,500 円 (本体 5,000 円)

■古今東西の文献による綿密な注解によりすべてを解き明かす。(内容)「四畳半」入門／本文と注解／その初音 (はつ) と仇浪 (あな)／「四畳半」裁判に於ける証言三種。
(推薦) 南博「本書は、一個の自由人として、戦争や政治に毒された現代文明から脱却して、超然と人間のエロスのな存在を追求した、稀有な大作家の傑作をあますところなく、浮き彫りにした労作である。」

釈迢空 人と文学 * 残部数冊

石内徹 著 [大空社 1995. 7] A5 判・410 頁
4-7568-0080-7 定価 8,543 円 (本体 7,767 円)

折口信夫研究資料集成 全11巻・別巻1

朝倉治彦監修・石内徹編 [大空社 1994. 10] B5 判
4-87236-928-9 定価 160,194 円 (本体 145,631 円)
* 残部数組

プルースト研究

全 4 冊・付録 1

[大空社 1985. 2] 4-87236-007-9
定価 16,500 円 (本体 15,000 円)



■フランス装アンカット版 (完全複製) (195 × 185 ミリ、函入)。1934・昭和 9 年 7 月・9 月・10 月・12 月 (作品社刊) に、『作品』同年 9 月所収の「誌上出版記念会」を付録。伊吹武彦、生島遼一、井上究一郎、市原豊太、淀野隆三、河盛好蔵、山内義雄、渡辺一夫、青柳瑞穂、杉捷夫、等々錚々たる執筆・訳者陣。

人間

全 71 冊・別巻 1

小田切進監修
高橋英夫解説
[大空社 1992. 9-1993. 3]
A5 判 (別巻上製)
定価 220,000 円 (本体 200,000 円)



■戦後日本文学の出発点となった記念碑的文芸雑誌 (鎌倉文庫刊、昭和 21. 1-26. 8。編集長・木村徳三) の複製。石川淳「処女懐胎」、高見順「わが胸の底のここには」、織田作之助「世相」、井伏鱒二「牝助」、堀田善衛「広場の孤独」、佐多稲子「私の東京地図」、上林暁「聖ヨハネ病院にて」、島本健作「赤蛙」、また河上徹太郎、中村光夫、桑原武夫、平野謙、中島健蔵、加藤周一、荒正人、花田清輝、吉田秀和、岸田國士、林達夫、等々 400 人以上の豪華執筆者は枚挙にいとまがない。三島由紀夫は本誌から文壇デビュー。別巻：鎌倉文庫と文芸雑誌「人間」(内容)戦後の記念碑的雑誌「人間」(小田切進：遺稿)／「人間」解説 (高橋英夫)／アンソロジー：鎌倉文庫と「人間」(川端康成、高見順、巖谷大四、永井龍男、三島由紀夫、遠藤周作ほか)／『人間』時代 (木村徳三)／総目次／挿画家名索引・著者名索引／鎌倉文庫出版リスト、鎌倉文庫参考文献

増補改訂 現代日本文芸総覧

文学・芸術・思想関係雑誌細目及び解題

小田切進 編 全4巻

[明治文献資料刊行会刊・大空社発売 1992. 12]

A5 判・上製 4-87236-258-6

定価 63,864 円 (本体 58,058 円) * 残部数組

■現代文学の主流を形成した思想・文芸関係主要雑誌を網羅 克明な「目次」詳細「解題」「索引」

〈商品の状態について〉

刊行年が古いため、読書に支障はないものの、経年による劣化 (小口のしみ、表紙クロスの焼け等) が見られます。ご注文の際にはご承知おきのほどお願いいたします。(大空社出版)

近代文学作品論叢書

大空社 1995-1998 刊行

残部
僅少

*は残部1組
(2023.10)

掲載ページ	書名	編者	巻数	刊行	ISBN	定価(税込)	本体価格
—	与謝野晶子「みだれ髪」	逸見久美 編	3巻	1997.11	4-87236-823-1	(品切)	
4	田山花袋「蒲団」	加藤秀爾 編	3巻	1998.7	4-87236-825-8	49,500円	45,000円
5	夏目漱石「夢十夜」	坂本育雄 編	3巻	1996.6	4-87236-817-7	48,058円	43,689円
—	柳田国男「遠野物語」	石内徹 編	4巻	1996.6	4-87236-818-5	(品切)	
6	長塚節「土」	梶木剛・河合透 編	4巻	1998.7	4-87236-826-6	66,000円	60,000円
—	谷崎潤一郎「刺青」	笠原伸夫 編	2巻	1997.6	4-87236-821-5	(品切)	
—	斎藤茂吉「赤光」	梶木剛 編	5巻	1995.11	4-87236-813-4	(品切)	
—	芥川龍之介「羅生門」	志村有弘 編	2巻	1995.11	4-87236-816-9	(品切)	
7	森鷗外「渋江抽斎」	長谷川泉 編	1巻	1996.11	4-87236-819-3	18,156円	16,505円 *
8	志賀直哉「和解」	池内輝雄 編	2巻	1998.12	4-87236-827-4	(品切)	
9	島崎藤村「夜明け前」	剣持武彦 編	4巻	1997.11	4-87236-824-X	66,000円	60,000円
10	西脇順三郎「Ambarvalia」	澤正宏 編	2巻	1997.6	4-87236-822-3	33,000円	30,000円
11	川端康成「雪国」	岩田光子 編	3巻	1996.11	4-87236-820-7	48,058円	43,689円
12	中野重治「村の家」	佐藤健一 編	3巻	1998.12	4-87236-828-2	49,500円	45,000円 *
13	永井荷風「墨東綺譚」	高橋俊夫 編	4巻	1995.3	4-87236-814-2	61,942円	56,311円
14	釈迺空「死者の書」	石内徹 編	3巻	1995.3	4-87236-815-0	41,650円	37,864円

[体裁] B5判・上製・クロス装

学術資料出版

大空社出版

東京都北区中十条 4-3-2
(〒114-0032)
TEL:03-5963-4451
FAX:03-5963-4461
eigyo@ozorasha.co.jp

お
取
扱
い